

歴史

歩・歩・歩
さんぽ

口マレを伝える

31のストリート物語

名島・松崎

名島・松崎地区
歴史ガイドマップ



名島・松崎地区歴史ガイドマップ・2025年
さんぽ会《名島グループ》

通り名と史跡案内《名島地区》



「名島」の語源は、神功皇后が三韓出兵のため名島の黒崎海岸から出航する際、海岸で将兵の名を呼び最後の兵の名を締め切ったので「名締め」、あるいは、船出する時に将兵の名前を呼んで乗船させたことから「名を呼ぶ島」が由来といわれています。

文明3（1471）年に刊行された『海東諸国紀』には、1400年代の名島の地形は、名島、櫛島の二つの島と博多湾に突き出た半島だったこと、また、名島・櫛島の太守だった藤原縄繁が、朝鮮（李氏）と交易をしていたことなどが書かれています。

天正15（1587）年に筑前国主となった小早川隆景が、名島の地形を利用して名島城を水城として築城しました。小早川家の統治期間は13年でしたが、この間、名島は筑前国の政治の中心地「首都」となりました。

明治22（1889）年の町村制施行で、糟屋郡名島村は、松崎、蒲田、名子、八田、土井、津屋、多田羅の各村とともに合併され、多々良村となりました。昭和25（1950）年の町制施行で多々良町名島となり、昭和30（1955）年に福岡市へ編入され、昭和47（1972）年に福岡市は政令指定都市へ移行し、東区名島となっています。

① 妙見通り

かつて名島沖に妙見島がありました。現在は陸続きになっていますが、昭和20年代までは、干潮時に歩いて島へ渡ることができました。

● 妙見島での茶会

小早川隆景は、名島城築城の普請見舞いとしてたびたび訪れた博多の豪商神屋宗湛や島井宗室と共に、妙見島と名島の間の浜で酒宴を開いたといわれています。妙見島では、簡易な茶室を設け茶会を開いたそうです。

● 太閤秀吉公茶遊井戸の跡（名島1丁目）

文禄元（1592）年、豊臣秀吉が名島を訪れた際に妙見島で茶会を開き、その時に使用した井戸の跡があります。



太閤秀吉公茶遊の井戸

② 帆柱海岸通り・③ 帆柱通り

国の天然記念物に指定された帆柱石があります。

● 帆柱石（名島1丁目）



帆柱石

樅属の珪化木。土中に埋もれた樹木に珪酸が染みこんで木の組織と入れ替わり、化石となりました。第三紀層（6400万年から170万年前）にできたといわれています。

伝説では、神功皇后が三韓から帰還されたときの船の帆柱が化石になったとものとされ、帆柱石の名称の起源となっています。

昭和9（1934）年に国の天然記念物に指定されました。

④ 黒崎海岸通り

神功皇后が三韓出兵の際、御出立された地と伝えられています。黒崎浦ともいわれています。

● 縁の石（名島1丁目）

神功皇后は、三韓出兵の際にご懐妊されており、この石に腰をおろして休まれたといわれています。このため、腰掛けると、安産や良縁に恵まれるそうです。



縁の石

まないたせ まないたいし
● 砧板瀬〈俎石〉（名島1丁目）

神功皇后が、三韓から凱旋されたとき、将兵と祝宴を開いた場所といわれています。

べんざいてんどお
⑤ 弁財天通り

名島神社、弁財天社、宗栄寺があります。

なまじんじゃ
● 名島神社（名島1丁目）

神功皇后が三韓出兵の際、宗像三女神に遠征の無事を祈願されました。無事帰還できたことから、祈願成就のお礼として、名島に宗像三女神を御奉斎されたのが名島神社の起源といわれています。筑前国主となった小早川隆景は、天正16（1588）年に名島城を築城する際、社を海岸に移しました。元禄9（1696）年に、第四代黒田藩主綱政が、現在の場所に戻しました。



名島神社

そうえいじ
● 宗栄寺（名島1丁目）



宗栄寺・弁財天社

徳川第三代将軍家光の時代に島原で天草一揆（島原の乱）が起きました。幕府はこれを鎮圧するよう九州の諸大名に命じ、第二代黒田藩主忠之も出陣しました。寛永15（1638）年、黒田藩の武将として出陣した岡田半左衛門利良とその子岡田左右衛門正興は、戦いの中で共に戦死しました。利良の妻は、夫と子の死後、尼（向春院）になり、戦死した父子を博多区御供所町の妙楽寺に埋葬しました。戦で着用していた甲冑、肌着は名島城址の麓に納め、精舎を建て、利良の家臣手島半兵衛の子で比叡山で修行していた真性坊俊道を開基としました。向春院は、死後宗栄と追号され、寺は

宗栄寺となりました。

宗栄寺は、神宮寺の末寺でした。名島弁財天の別当寺を務めていた神宮寺が、明治の神仏分離令で廃寺となり、宗栄寺が弁財天の別当寺となりました。

しちべえやしきどお
⑥ 七兵衛屋敷通り

名島城御用商人の七兵衛の屋敷がありました。

べんてんばしどお
⑦ ダンベ弁天橋通り

名島火力発電所への燃料（石炭）を海路で運んでいた船（ダンベ船）の船溜りがありました。発電所への引き込み水路に「弁天橋」が架かっていました。

しろやまみち
⑧ 城山道

名島城本丸跡への道です。

●^{なしまじょうし}名島城址（名島1丁目）

『筑前国続風土記』によると、天正15（1587）年筑前国主となった小早川隆景は、立花城に入城しましたが、国を治めるには不便であるとして、名島にあった立花城の支城を改修して城を築きました。豊臣秀吉は、文禄元（1592）年、朝鮮出兵（文禄の役）で肥前名護屋城へ赴く際、名島城に立ち寄り3日間滞在しました。

慶長5（1600）年、関ヶ原の戦いの後、小早川家が備前美作へ移った後に筑前国主となった黒田長政は、三方を海に囲まれ城下が狭く大国を治めるには適していないとして、福岡に城を築きました。築城の際、名島城の石垣、櫓、門などの建造物を解体して移転しています。このため、現在の名島には城の遺構がほとんど残っていません。このことを「名島引け」といいます。（「名島引け」についてはP7に解説）

平成2年（1990）年に始まった文化財調査で、隅櫓跡、瓦、本丸大手の石垣跡、本丸北側の建物跡などが確認されました。現在は、名島城址公園として市民の憩いの場所となっています。

●^{なしまじょうしこうえん}名島城址公園（名島1丁目）

名島城本丸があった場所には、隅櫓跡や下野（栃木県）の足利学校ゆかりの不断梅があります。また、地を這うように枝を伸ばす臥龍桜は、春の名所になっています。



臥龍桜

⑨^{どお} リンドバーク通り

昭和2（1927）年に大西洋単独横断飛行に成功したリンドバークが、昭和6（1931）年に名島水上飛行場に夫人を連れて飛来しました。

●^{なじますいじょうひこうじょうあと}名島水上飛行場跡（名島1丁目）



名島水上飛行場に着水したリンドバーク夫妻

昭和4（1929）年、名島水上飛行場が完成し、福岡と大阪の間に1日1往復の定期運航が始まりました。翌年には、上海との間にも定期航路が開設され、国際空港となりました。

しかし、その後飛行機は陸上機が主流となり、昭和11（1936）年、水陸両用の飛行場が雁ノ巣に建設され、名島の水上飛行場は、昭和16（1941）年に閉鎖されました。

⑩^{はつでんしよどお} 発電所通り

東洋一といわれた名島火力発電所がありました。

●名島火力発電所跡（名島1丁目）

大正9（1920）年、最大出力1万kWの九州電灯鉄道(株)名島発電所として営業運転を開始しました。翌年には最大2万kWの出力が出せる東洋一の発電所になりました。当時は、大気汚染も問題にならなかったようで、61mの2本の煙突から昼夜を分かつまでもくもくと黒煙を吐いていました。大正11（1922）年には、煙突も4本となり、最大出力4万kWの発電所となりました。戦後、九州電力(株)に引き継がれ、昭和35（1960）年に、老朽化のため41年の営業運転を終え廃止されました。昭和37（1962）年には、4本の煙突も取り壊されました。

跡地には、名島運動公園として野球場、テニスコート、サッカー、グラウンドゴルフ場などが整備されています。



名島火力発電所

⑪ 飛行場道

国道3号から名島水上飛行場跡へ続く道です。建設当初は木レンガ道でした。

⑫ 船頭町通り

小早川隆景が名島城主だったころ、水軍の船頭が住んでいました。

⑬ 引き込み線通り

今の西鉄名島駅付近から名島火力発電所へ、燃料の石炭を運ぶ引き込み線の鉄道がありました。

⑭ 羽衣台道

名島は、大陸や半島との交易の場所となっており、多くの渡来人が住んでいたといわれています。渡来人の衣装にちなんだ通り名です。

⑮ 内堀通り

名島城の内堀があった場所です。深い堀には、夏は蓮が茂り鯉やスッポンがいたそうです。堀の水は、昭和30年代まで名島火力発電所の貯水池としても使われました。

⑯ 潮汲み道

城の北側の崖下は香椎潟で、潮汲みの場所がありました。

⑰ 岩見重太郎通り

小早川隆景の家臣で剣豪岩見重太郎が誕生した地に由来しています。

お観音さま広場には、岩見重太郎誕生之地碑、表槽屋三十三番札所の観音堂、神宮寺歴代の住職の供養塔、龕塔碑があります。



名島城三の丸跡

いわみじゅうたろうたんじょう ち
●岩見重太郎誕生の地（名島3丁目）

岩見重太郎は、小早川隆景の家臣で剣術指南役の岩見重左衛門の次男として生まれました。大蛇や妖怪狒狒の化け物退治をはじめとする数々の武勇伝を打ち立て、伝説的な豪傑といわれました。天橋立で父の敵を討ち、その後薄田兼相と名乗り、豊臣秀吉に仕官しました。大坂夏の陣で真田幸村、後藤又兵衛らと出陣しましたが、道明寺の戦いで戦死しました。



岩見重太郎誕生之地碑

じんぐうじあと
●神宮寺跡（名島3丁目）

神宮寺は、比叡山延暦寺の末寺で、小早川隆景が名島城主の頃は、二の丸にあった寺です。名島弁財天の別当寺を務めていましたが、明治になって神仏分離令が公布され廃寺となりました。広場には、歴代住職の供養塔があります。



神宮寺跡（供養塔）

がんとうひ
●龕塔碑（名島3丁目）

神宮寺が廃寺となるまでの沿革が刻まれていましたが、戦後、碑文は削られました。碑の横に碑文の説明板があります。



龕塔碑



大名通り（奥の森は二之丸跡）

だいみょうどお
⑱ 大名通り

名島城の城下町。小早川隆景や黒田長政の重臣の屋敷がありました。

名島城トリビア《名島引け》

黒田長政が、福岡城を築くとき、名島城の石垣や建築物を福岡城の資材とするため解体し移転しました。このため、名島城址には、城の遺構はほとんど残っていませんが、名島城の遺構として数少ない貴重なものがあります。

●名島門（福岡市中央区城内）※福岡市指定有形文化財

この城門は、名島城の脇門だったといわれています。黒田二十四騎の一人である林掃部に下げ渡され、邸宅の門として使用されていました。その後現在地に移転されました。

●唐門（福岡市博多区千代 崇福寺境内）

※福岡県指定有形文化財

名島城の遺構で、慶長年間（1596年～1614年）に崇福寺に移築されたと伝えられています。正面に唐破風を着けた向かい唐門です。現在は、黒田家の藤巴の本瓦葺きですが、以前は檜皮葺きだったそうです。

●宗生寺の山門（宗像市大穂 宗生寺）

名島城の搦め手門です。慶長5（1600）年に山門として移築されました。一本のノグルミの大木で造られています。

●名島城内の障壁画「梅に鴉図」 うめ からす

※重要文化財 京都国立博物館所蔵

襖六面の金地の大画面に、梅樹や群鴉が墨一色で描かれています。彩色は雪を思わせる胡粉と点苔の白緑が樹幹に添えられているだけです。冬枯れの情景が、背地の金と雪の白と梅鴉の黒で調和しています。

小早川隆景の甥の毛利輝元の御用絵師、雲谷等顔の作と伝えられています。黒田長政の名島城入城とともに黒田家に伝わったものです。

●名島城大手口の石垣跡（本丸跡に残る貴重な遺跡）

名島城は、織田信長から豊臣秀吉時代に造られた城を特徴とする織豊系城郭です。九州では、名護屋城（佐賀県唐津市）、中津城（大分県中津市）、麦島城（熊本県八代市）など数例しかありません。なかでも、名島城には、大手口が残っており、極めて貴重な城郭跡です。



名島門（舞鶴公園）



唐門（崇福寺）



搦め手門（宗生寺）



大手口と斜面に残る石垣跡

通り名と史跡案内《松崎地区》



「松崎」の地名は、砂地のことを「マス」といったことが由来だそうです。多々良川に近く、「砂地の多い処」という意味で、「マスザキ村」と呼び、古くは「真洲崎村」と書いていましたが、江戸時代に「松崎村」となりました。

明治22（1889）年の町村制施行で、糟屋郡松崎村は、蒲田、名子、八田、土井、津屋、多田羅、名島の各村とともに合併され、多々良村になりました。昭和25（1950）年に町制施行で多々良町松崎となり、昭和30（1955）年福岡市に編入され、昭和47（1972）年に福岡市は政令指定都市へ移行し、東区松崎となっています。

松崎地区には南北に唐津街道が通っています。ちなみに、昔の旧道の幅は、どれくらいあったのでしょうか。

幹線道路が2間（約3.6m）で馬や牛を引ける幅、支道は1間（約1.8m）で大八車や籠が通れる幅だったといわれています。もちろん、場所によってはもっと広いところもありました。



唐津街道
(糟屋郡新宮町原上付近)

わたしばみち
①9 渡場道

文政11（1828）年の洪水で、名島橋が流されてから明治43（1910）年に橋が架けられるまでの間、渡し船が川を渡る手段でした。名島側の西鉄貝塚線とJR鹿児島本線の間に渡場がありました。

なじまばし
●名島橋（名島2丁目）



名島橋

昭和8（1933）年に完成した鉄筋コンクリートアーチ橋です。九州の大動脈である国道3号の道路橋で産業、経済、文化の発展に大きく寄与しています。白く輝く御影石で覆われた優美な姿は、周囲とよく調和し、福岡のシンボルとして市民から愛されています。

名島橋より4年早く完成した萬代橋（新潟市・信濃川）とその姿がよく似ており、兄弟橋となっています。（P14に橋の解説）

こうしゃほうじんちみち
②0 高射砲陣地道

太平洋戦争中、都市防衛のため高射砲部隊がおかれていました。

ももやまみち
②1 桃山道

名島小学校から陣の越にかけての高台は、古くからの住居地で古代の遺跡も発見されています。桃山道付近は、高台の地形を生かして、昔は果樹園が広がっていたそうです。

やきみち
②2 かめ焼道

多々良川東岸から河岸段丘の丘陵を登る道で、古い時代にこのあたりでかめ甕を焼いていたことにちなんでいます。

こうまたみち
②3 高又道

今は住宅地になっていますが、古くは松崎本村への道でした。道路脇の高又地藏尊は、今も大切に信仰されています。

こうまた ろくじぞうそん
●高又の六地藏尊（名島4丁目）

六地藏とは、地藏菩薩が地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上の六つに分身し、あの世とこの世の苦しみを救うという平安末期から鎌倉時代の地藏信仰のなごりです。石の風化状態から江戸時代以前であろうと推測されます。



高又の六地藏尊

じぞうみち
②4 いぼ地藏道

名島小学校横の高台を通る道です。古くからご利益の高いお地藏様として有名で、地元では篤く信仰されてきました。

こうまた じぞう
●高又のいぼ地藏さん（名島4丁目）

台座の下、岩のくぼみに水溜まりがあり、この水をイボにつけると治るといわれました。



いぼ地藏さん

いわないけみち
②5 岩名池道

かつて岩名池という溜め池がありました。

がっこうみち
②6 学校道

名島小学校への通学路です。昔はうっそうとした森の中を通る道でした。

なじまこふん
●名島古墳（名島4丁目）



三角縁神獣鏡

名島小学校南側の丘陵地で、宅地造成時に発見された全長30mの前方後円墳です。

昭和54（1979）年から昭和61（1986）年の調査で、古墳時代前期の邪馬台国からヤマト王権成立にかけての時代に近い頃の古墳であることが判明しました。古墳から副葬品として発見された三角縁神獣鏡は、魏の国王から卑弥呼へ贈られた鏡で、卑弥呼の死後、各地の有力者へ配布されたものといわれています。名島古墳の被葬者も、ヤマト王権を支え、海外の対外交渉に関与した勢力の首長だったのではと推測されます。

ほんむらちかどう
●本村地下道（名島2丁目）

名島小学校へ通学する児童のために造られました。ＪＲ鹿兒島本線と西鉄貝塚線の踏切を渡ることなく自由に安全に通行できます。昭和17（1942）年、当時の多々良村長が、国の鉄道大臣に陳情して実現しました。戦争や戦後の混乱で工事は中断しましたが、昭和33（1958）年に工事が再開され、翌年に完成しました。今は、学童だけでなく一般の方も利用する貴重な通路になっています。



本村地下道

ほんむらみち
②7 本村道

多々良川沿いから旧松崎村を通るかつての幹線通りでした。

まつざきおうかん
②8 松崎往還

名島の渡し場から大橋までの多々良川沿いの道です。多々良川緑地や多々良川河畔公園には遊歩道が整備されています。散歩やジョギングに最適です。

た た ら が た
●多々良潟（松崎3丁目）

多々良の語源は、足踏み式「ふいご」の「踏鞴」といわれています。多々良川流域一帯には、六、七世紀ころ、百済から鋳物師の団が移り住み、流域に工房を構え、川砂から取れる砂鉄を使って踏鞴を踏み鋳物を造っていました。日本最古の名鐘といわれる京都妙心寺や太宰府観世音寺の梵鐘は、ここで鋳造されたといわれています。



多々良川河畔公園遊歩道

ほそかわゆうさいか ひ
●細川幽斎歌碑（松崎3丁目）



細川幽斎歌碑

細川幽斎（藤孝）は、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康に仕えた室町から安土桃山時代の武将であり、和歌を詠む文化人でもありました。

歌碑は、豊臣秀吉が九州征伐で出陣した際、同行した幽斎が、陣中日記『九州道の記』に残した歌です。

「いにしへは ここに鋳物師の跡とめて 今もふみみる たたら潟かな」

『九州道の記』には、細川幽斎が戦力として合戦に参加するでもなく、豊臣秀吉の陣中見舞いくらいの悠長な下向だったことや、名所旧跡に親しみ、俳諧即興の和歌や連歌を詠み、秀吉と同席しては風流韻事を楽しんだ様子が記されています。

さらに、多々良潟について、「香椎浦を通して帰る時に 船を 多田羅の崎あたりに寄せて徒歩（かち）にて歩ける浜」と記されています。

ぜん べ えい わ
●善兵衛岩（松崎1丁目）

松崎出身の藤野善兵衛の功績を伝える石碑です。太平洋戦争中、海軍のパイロットとして数々の武勲を立てられました。石碑には、水難防除の不動明王が合祀されています。

ここは昔、松崎稻荷神社のお汐井取り場がありました。



善兵衛岩

れんげざか からつがいどう
② 蓮華坂（唐津街道）

千早から福岡空港方面へ向かう国道3号博多バイパスの松崎中学校辺りの坂道です。この付近は昔、多々良浜の東端に位置して蓮華が茂り、岩石が蓮華の姿をしていたのでこの坂を蓮華坂と呼びました。唐津街道は、小倉・唐津を結ぶ街道で、箱崎の宿から多々良川の大橋を渡り、今屋敷道から蓮華坂を通して古賀の青柳の宿へ向かいました。



●わくろ石（松崎2丁目）



わくろ石

その昔、農民は水利に苦勞し、蛙の大将「わくろ」を祭って雨乞いの神としました。更に、立ち歸りの神として交通安全、疫病除けの神としても松崎村内の尊崇を集めました。

また、この近くは足利尊氏が多々良浜の合戦中、援軍を頼むとの書状を鎧の片袖に包んで送り、戦いを勝利に導いたとして「片袖塚」または「將軍使い」ともいわれています。

●松崎神社（松崎1丁目）

宝暦年間（1750年代）に社が建てられ、稲荷社といわれていました。正面に「正一位稲荷大明神」の額がかかっています。黒田藩主は、参勤交代の途中、蓮華坂を越えるときに立ち寄り、神社を参拝したそうです。

昭和3（1928）年、昭和天皇即位ご大典を記念して稲荷社と天神社を合祀し、拝殿が建築され松崎神社となりました。平成3（1991）年、松崎中学校開設のため約200m移動し、現在地に移転しました。



松崎神社

30 いまやしきみち から つがいでう 今屋敷道（唐津街道）

蓮華坂から火の見下を経由して大橋までの今屋敷地区の通りです。

●藤野小四郎翁記念碑（松崎1丁目）

明治初期に牛馬を使って田畑を耕す牛馬耕が普及し、その技術向上に関心が寄せられていました。そこで始まったのが、牛馬に犁を引かせて畦を作ってその技術を競う競犁会（けいりかい）です。多々良では、明治13（1880）年に全国に先駆けて最初の大会が開催され、提唱したのが松崎で農業をしていた藤野小四郎でした。農業振興に尽力し、農具発明者としても活躍しました。昭和8（1933）年、功績を称え記念碑が建てられました。



藤野小四郎翁記念碑

●火の見下（松崎1丁目）

ここは、唐津街道に面していて、近くに一里塚が設けられており、福岡城を発して箱崎宿に次ぐ二番目の里程標があった所です。

昭和13（1938）年ころに火の見櫓と消防車車庫がありました。車庫には、アメリカフォード社製の消防自動車が格納されていました。「火の見下」と呼ばれるのは、当時の名残です。

た た ら が わ そ う な ん し ゃ の ひ
●多々良川遭難者之碑（松崎1丁目）



多々良川遭難者之碑

明治維新後間もない、明治6（1873）年6月に起こった筑前竹槍一揆によって犠牲となった三人の慰霊の碑です。福岡へ向かっていた大蔵省の役人三人は騒動に巻き込まれ、一揆集団によって多々良川の中州に引き立てられ惨殺されました。その後、大橋、松崎地区ではしきりに火災が起こり、疫病が流行しました。殺された役人のたたりではないかと噂が広がり、明治30（1897）年に地藏尊を刻んだ多々良川遭難者之碑（三面地藏）が建立されました。その後は、火災も疫病も収まったということです。三人の命日には、現在も慰霊祭が行われています。

碑の横には千手観音が祀られ、六地藏が合祀されています。

お お な も ち じ ん じ ゃ
●大名持神社（多々良2丁目）

この神社はその昔、多々良川のほとり須崎（大橋、浜田）の景色のよい丘にあって大名持神社と呼ばれました。大名持ち神（大国主神、大黒様）をお祀りし、大橋、浜田の守護神として、また香椎宮の末社として今日に至っています。



大名持神社

じん こし み ち
③① 陣の越道

「多々良大橋の東北なる山上に、陣の越という所あり。」
『筑前国続風土記』

じん こし
●陣の越（松崎1丁目）

鎌倉幕府を打倒し、後醍醐天皇のご親政（建武の中興）が実現しました。しかし、ご親政に不満を持つ武士とともに反旗を翻した足利尊氏は、天皇方の新田義貞や北畠顕家に破れ、九州へ逃れてきました。天皇方の肥後の菊池武敏は、尊氏を討つため多々良川の西側に陣を敷き、陣の越に陣を敷いた尊氏と対峙しました。

『太平記』によると、菊池方の軍勢は四、五万騎兵、これに対し尊氏方は三百騎兵と圧倒的に劣勢でした。勝ち目がないと思った尊氏は窮地に陥りましたが、地の利や菊池方に寝返りなどがあり、形成は一転して足利方の勝利となりました。

陣の越から見下ろす多々良浜は、足利尊氏が室町幕府を開くきっかけとなった戦いがあった場所です。



多の津の古戦場跡から陣の越を望む

名島橋トリビア

昭和8（1933）年完成・「土木学会選奨土木遺産」・「国の登録有形文化財」
鉄筋コンクリートアーチ橋、延長204.1m・幅24m（6車線）

●当時としては破格の規模だった名島橋

名島橋が完成した昭和初期の日本は、自動車時代の幕開けといっても、現在のような激しい交通量の時代が到来するとは予想も出来ない時代でした。90年以上たった今でも通用する破格の規模の橋がなぜ架けられたのでしょうか。

戦車や野砲重砲が通れるような広く頑丈な橋としての「軍用道路説」、産業の振興を図るために輸送経路を新設充実する「路面電車説」、名島橋着工の年に名島水上飛行場が開設され、橋自体を非常時の滑走路として使用する「代用飛行場説」、関東大震災の教訓を取り入れた避難経路を確保するための「関東大震災説」などがあります。

●初代の名島橋を架けたのは誰

文禄元（1592）年、朝鮮出兵（文禄の役）のために豊臣秀吉の名護屋城下向に備え、名島城の城主だった小早川隆景が多々良川に橋を架けました。現在の名島橋の場所（初代名島橋）と上流の大橋の二橋を架けたといわれています。上流の大橋は、唐津街道が多々良川を渡る橋として利用されました。初代の名島橋は、文政11（1828）年の洪水で流失し、その後は渡し船で川を渡っていました。明治43（1910）年に地元有志の出資で総ヒノキ造りの木橋が完成しましたが、木橋の維持管理は負担が大きかったようです。昭和8（1933）年に現在の名島橋が完成し、木橋は撤去されました。今の橋は、小早川時代から三代目となります。

名島橋より4年早い、昭和4（1929）年に完成した新潟市の信濃川に架かる萬代橋は、名島橋とよく似ています。平成6（1994）年、名島橋架橋60周年を記念して両橋間で兄弟橋の縁組みが成立しました。



名島橋

【名島・松崎の愛称通り】

平成19（2007）年に名島校区自治協議会では、「歴史の街づくり」をめざし、名島・松崎の古い道路や史跡へ通じる道路に親しめる愛称を募集しました。

平成20（2008）年に名島公民館は、名島校区語り部の会の協力で、募集した名島・松崎の古い通り名の標識（愛称パネル）を作製しました。

① 妙見通り	② 帆柱海岸通り	③ 帆柱通り	④ 黒崎海岸通り	⑤ 弁財天通り
⑥ 七兵衛屋敷通り	⑦ ダンペ弁天橋通り	⑧ 城山道	⑨ リンドバーグ通り	⑩ 発電所通り
⑪ 飛行場道	⑫ 船頭町通り	⑬ 引き込み線通り	⑭ 羽衣台道	⑮ 内堀通り
⑯ 潮汲み道	⑰ 岩見重太郎通り	⑱ 大名通り	⑲ 渡場道	⑳ 高射砲陣地道
㉑ 桃山道	㉒ かも焼道	㉓ 高又道	㉔ いぼ地藏道	㉕ 岩名池道
㉖ 学校道	㉗ 本村道	㉘ 松崎往還	㉙ 蓮華坂	㉚ 今屋敷道
㉛ 陣の越道				

出典

- 『日本名刹大事典』 雄山閣
- 『福岡県百科事典』 西日本新聞社
- 『故郷名島の歴史』 故郷名島の歴史編集委員会
- 『松崎の歴史 その群像』 松崎の歴史発行委員会
- 『郷土史たたら』 郷土史たたら作成委員会
- 『平成17年度東市民センター歴史講座 “ひがし区歴史入門” 活動報告書』
- 『平成18年度東市民センター歴史講座 “ひがし区歴史入門” 活動報告書』
- 『福岡市制100周年記念 ふるさと100年』 西日本新聞社
- 「国土交通省 福岡国道事務所」
- 「国土交通省 新潟国道事務所」

【お問い合わせ】

福岡市東区総務部 生涯学習推進課

☎ 812-8653 福岡市東区箱崎2丁目54-1

☎ 092-645-1144 FAX 092-645-1042

E-mail gakushu.HIWO@city.fukuoka.lg.jp

URL <https://sanpokai.tank.jp>

第1版
第2版
第3版
第4版

平成20年9月
平成24年2月
平成27年7月
令和3年2月

第5版

令和7年10月

発行
編集

福岡市東区総務部 生涯学習推進課
東区歴史ガイドボランティア連絡会「歩歩歩（さんぽ）会」